



2014 年 (平成 26 年)
6 月号 (No. 829)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

多様化がすすむ大学登山クラブの現状

城島紀夫

先月号の大学山岳部特集に続き、今月は城島紀夫さんにワンダーフォーゲル部や探検部なども含む大学の登山(野外活動)クラブの現状について寄稿いただいた。後半には、戦後に生まれたワンダーフォーゲル部の成り立ちについても言及している。

終戦から今日までの間に、各世代に宿る価値観の大きな変動が続き、それにつれて大学で登山活動を行なうクラブの活動状況も変化してきた。近年の世間の風潮を作り出している価値観の特徴は、個人志向が強くなったことと現在を重視するようになったことだと言われている。

大学の課外活動における登山クラブはこのような価値観の流れにに応じて、登山活動とは異なるレジャー種目を取り込んで活動を多様

大学登山クラブの部数は

大学で活動している主な登山クラブの現在の状況を紹介する。

すべての国立大学ホームページを閲覧して、課外活動の公認クラブ(団体)の内、主な登山クラブであるワンダーフォーゲル部(以下、WV部と略記)、山岳部、探検部の各クラブの部数を表・1に集計した。公立・私立大学については、戦前から大学として認定されていた

旧制の公立2校と私立27校を調査対象とした。

表・1 大学の主な登山クラブの部数(2014年5月現在)

	大学数(校)	WV部(部)	山岳部(部)	探検部(部)
国立(総合・複合)	47	41	25	17
国立(単科・大学院大)	39	17	11	2
計	86	58	36	19
公・私立(旧制)	29	23	20	17
合計	115	81	56	36

国立大学について見ると、WV部が総数86校の内、過半数を超える58の大学で活動している。次いで山岳部が36の大学において、探

目 次

多様化がすすむ大学登山クラブの現状・・・	1
祝日「山の日」再来年から実施決まる	
《山に親しむ...》の意義周知で次のステップへ・・・	4
YOUTH CLUB 一般向け登山講習会始まる・・・	6
「日本山岳会だより」100号に・・・	7
ネパール・ヒマラヤの新規解禁峰と登山料金改定・・・	8
追悼 山梨支部再建に努力した古屋学さん・・・	9
支部だより・・・	10
信濃支部	
図書紹介・・・	12
東西南北・・・	14
会務報告・・・	15
ルーム日誌・・・	16
会員異動・・・	16
新入会員・・・	17
INFORMATION・・・	17
日本山岳会所蔵資料紹介 No.12・・・	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

検部が19の大学においてそれぞれが活動している。

単科・専門の大学および大学院大学の39校は総合・複合大学とは少し趣を異にしているようだ。国立大学の中で山岳部が休部となっている大学は、新制大学の方が旧制よりも幾分多い。

次に前記(表・1)の3つの部が同じ大学の中で共存している様子を、表・2に「共存区分」として分類・集計した。

私立大学を含めて数えると、3つの部がともに登録されて活動している大学(共存区分A)が全114大学の内22校もある。

WV部と山岳部が共存している大学が44校(AとB)の多数となっていることがわかる。2部以上が共存している大学の合計数は57校

表・2 大学の登山クラブの共存状況(2014年5月現在)
(○は部あり、×は部なし)

共存区分	A	B	C	D	E	F	G	H
WV部	○	○	○	×	○	×	×	×
山岳部	○	○	×	○	×	○	×	×
探検部	○	×	○	○	×	×	○	×
合 計	22	22	9	4	28	8	1	21
国立大学	12	15	5	1	26	8	1	18
公・私立大学	10	7	4	3	2	0	0	3

(A～D)にのぼっており、全大学の半数に相当している。

WV部が単独で登山活動をしている大学(E)が28校となっている模様も注目しておきたい。

この3部がない大学(H)は教育系大学および大学院大学に多い。

■部員数を掲載したホームページが少ないため、部員数を紹介することができなかった。

活動内容の多様化とは

近年において注目すべきことは、部の名称からその活動内容を類推することが難しくなっていること

である。同じ大学の中で、WV部、山岳部、探検部の活動内容が相互に重複しているものが非常に多くなっている。

3つの部がそれぞれに、登山活動のほかに、ボルダリング、ラフティング、カヌー、サイクリング、ロードワンダリング、無人島キャンプなど様々なアウトドア活動を取り込んでおり、部の活動目標が判然としないものが多い。そこで、部数が最も多いWV部について、活動状況を調査・分類して、次の3つの「多様化分類」を作成してみた。

①登山活動のみを行なっている部
在来どおりに登山に特化して活動している。中には「登山部です」と謳っているWV部もある。

②部行事である登山活動と並行して、パートワンダリング(個人企画)として各種アウトドア活動を取り入れている部

③基本となる活動が定められておらず、すべて部員の希望により様々な種類の活動をその都度実施している部となっている。

多様化分類②と③の中に、年間計画は未定としている部が見られる。山岳部においても分類②が見

られるようになっており、冬山登山を行なわず、WV部とほぼ同じ活動をする部も散見される。

分類①は、その大半が国立大学であり、伝統の継承を感じさせる。

分類②の中には①に近いものから③に限りなく近いものまでが含まれている。

分類③は探検部に最も多く、また、別に調べた結果では戦後に新設された私立大学に多い。

注目したいことは、近年において分類③に属する部が増加の傾向にあることである。自由参加の行事が主体となっており、年々の部員の興味の赴くままに活動内容がその都度決められている。全員参加することは目標とされていない。多様化と世間で言われているこの状況は、活動自体が無目標化に向かう行動だと考えられる。

これらの傾向には多くの課題(後述)が含まれているようだ。

新制大学に誕生したWV部

戦後に生まれたWV部が今日のように発展してきた事跡は、戦前の山岳部からの「分化」現象であったと捉えることができる。

WV部が課外活動の体育系の種

目として初めて公認された経過は、次のようなものであった。

1949(昭和24)年に我が国の教育制度が大幅に変更されて新制大学(6・3・3・4制)が始まり、同時に体育実技と体育理論(講義)が初めて必修科目とされた。戦前は高等学校(旧制)までが必修であった。占領政策の影響で栄養・公衆衛生ならびに体育・レクリエーションに関する教育が大学段階まで延長されたのであった。

同年に体育実技の運営方法などを研究するため旧制総合9大学体育研究会が発足した。東京大学と関東地区の私立大学8大学が加わった。

これに先立つ終戦直後の45年に、明治大学WV部は戦時中の休部から復活し夏季合宿などを行なっていた。大学に体育連合会(現・体育会)が発足すると同時にこれに所属し、大学のWV部として初めて体育系の課外活動団体に認定された。これが先例となり、後続して設立されたWV部は体育会系に加えて活動を始めることになった。

国立大学で初のWV部が創設されたのは東京大学であり、WV連盟への加盟、運動会(体育会)への

加盟、WV部の組織化などについて国立大学における先導役を果たしたのもこの研究会が契機となっていたようだ。

研究会の中で学生数が多い私立大学は、体育実技の単位を授与するために次の2つの方法を採用した。

(一)委託部員制度 体育会に加入している各部の正部員に対して、部長ならびに監督の証明をもって単位を認定した。

(二)認定正課の設定 課外活動の内、体育会所属の部が行なう野球大会、山岳実習、WV、スキーなどのコースを大学が正課(正規の教育課程)と認定し、参加者に単位を与えた。国立大学においてもWVや野外コースといった企画が体育正課として採用された。

50年前後に明治大学が行なった夏季WVコースには1000・200名の参加があり、ファイアーを囲むキャンプと集中登山が人気を呼び、これを契機としてWV部への入部希望者が急増した。

以後、WV部が全国の大学において続々と設立され、チャンピオンスポーツではないレクリエーション・スポーツとして課外活動の

1種目に公認されていた。

この背景には、新制大学発足と同年に社会教育法が施行され、文部省が青少年(19歳以下)に対するキャンプを重点種目として、レクリエーションの普及に力を注いだことがある。

その後、WV部には冒険的ではない登山、夏山縦走登山の愛好家が集まるようになり、また、キャンプ中心の青少年育成運動とは異なる登山活動に重点が移されていた。

WV部と命名した由来は

大学WV部のホームページを見るとたくさんの部が冒頭にこのドイツ語の意味を説明している。

我が国では33(昭和8)年に文部省の外郭団体である奨健会が、歩行運動団体を結成してWV部を設立したのがこの団体名称の起源である。

命名の由来は、奨健会が当時の我が国民のドイツに対する親愛の情や憧憬の情を巧みにとらえて、歩行運動の普及にドイツの青少年運動団体の名前を利用した単なる借名だったのである。

このとき以来、WV部は大学の

体育会の中で山岳部と対抗する立場にあったため、「登山部」というような名称を名乗り、あるいは変更することができなかったものと見られる。

今日では、部名をドイツ語とする意味はすでになくなっており、また、国際感覚の上からもこのドイツ語を避けて日本語の部名とする方が適切ではないだろうか。

多様化の行方と課題

登山クラブの活動多様化現象は66(昭和41)年ごろから始まった。

全国の大学で体育離れと呼ぶ現象が起り、体育系の部員が減少し、同好会が無数に生まれた。私生活を重視する傾向が強まると同時に、出世を目標とする志向は希薄になったといわれた。

大学進学率は50%を超えて、女子大学生の割合は43%に達した(いずれも2013年度)。

現在のアウトドア活動の流行に伴って、大学生の登山クラブの活動内容は、さらにレジャー化する部が増加すると見られる。

山岳部においては勿論のこと、WV部においても活動目標を登山に限定することを強く希望し

たい。

登山活動に付随して行なわれているアウトドア活動は、次第に「分化」を遂げていくに違いない。

大学の課外活動は将来を担う世代のための教育制度の中に位置付けられている。拘束性を伴う団体を嫌って個人の自由だけを求める行為は、遊戯にすぎない。

体育的な目標や技術習得上の目標がない活動は、教育性に欠ける気晴らしの行動であり、大学の課外活動に値しないものだろう。

登山クラブが登山活動に目標を定めなければ、登山技術の伝承や部の伝統の維持が不可能となり、OB会の存続も危うくなると懸念され始めてから久しい。

課外活動は、学生の自治活動とされているため、大学当局の指導が及び難い分野となっている。

今やWV部や探検部のOB会が担うべき大切な役割として、登山技術を指導することと併せて、現役部員の目標性や共同体意識を涵養するために活動内容を特定することや、部名を変更するなどの具体的な行動に力を注ぐことが喫緊の要事となっているのではないだろうか。

National Holiday

祝日「山の日」再来年から実施決まる

《山に親しむ…》の意義周知で次のステップへ

「山の日」制定プロジェクト 成川隆顕

国民の祝日に「山の日」が加わっ

た。夏山シーズンの最盛期で、お盆休みにつながる8月11日である。《山に親しむ機会を得て山の恵みに感謝する》という祝日の意義は、山との深い関わりを考える、山の国日本の美しく豊かな自然環境を守る、山を楽しむ安全な登山を心がけるなど、人により、立場や環境によって様々に受け止められよう。いずれにせよ「山の日」を有意義な一日にしなければ、と思う。

祝日実施は再来年からである。我が日本山岳会としては、まずは2016年8月11日までの2年間で、より多くの人たちへの周知活動の期間ととらえ、会員一人ひとりが、支部や地域で、運動に参加していただくことをお願いしたい。「山の日」づくりで動いたこれまでの5年余を振り返り、不足した部分を、やりたくてもできなかったことを洗い出して、活動目標にしてほしい。

■祝日「山の日」法案成立

年明けから始まった第186回通常国会。「国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律案」（「山の日」祝日法案）は3月28日、衆議院に提出された。衆議院に議席を持つ9つの全会派の共同提案、超党派の議員立法である。法案は4月23日、内閣委員会で賛成多数で可決され、25日の本会議で賛成多数（起立による）で可決された。



5月23日の参議院本会議「山の日」法案が可決、成立した

また参議院では、5月21日に内閣委、同23日には本会議で、いずれも賛成多数で可決された。参議院の場合、本会議での採決結果は賛成213、反対15と議場内に表示された（写真）。両院とも、党議拘束をかけなかった2つの野党の議員から、少数だが反対者が出たようだった。ところで、「山の日」の理念はどこまで理解され、実行に移されているのだろうか。結論から言えば、準備は整いつつあるが国民的な広がりにはほど遠く、本当のスタートはこれからではなからうか。

《「山の日」制定運動正念場／拡大新組織で祝日実現へ》という当プロジェクトからの呼びかけが会報「山」に掲載されたのは今年の1月だった。この時点では、遠からず法案は成立するという見通しがあり、山岳5団体、とりわけその中核となつてこの運動を進めてきた日本山岳会に求められている役割について書いた。「正念場」という言葉は、法案の成否だけでなく、運動の理念、掲げた目的がどこまで実行できるかを問われる年だという意味で使ったつもりである。

こうした状況を踏まえ、昨年11月に発足した全国「山の日」制定協

議会は3月4日の臨時総会で規約を改定し、「山の日」を制定し祝日とする」とだけ書かれていた目的条項に《「山の日」を制定し、その意義を広く国民に伝え、「山の日」にかかる広範な分野の発展に寄与すること》と、制定以後の運動展開を付け加えた。さらにまた、5月26日に開いた通常総会で会の名前から「制定」を外して全国「山の日」協議会と改めた。

■《意義ある日》への参加

超党派議員連盟のスピーディーな取り組みによって早々と手にした祝日制定である。その「山の日」を《意義ある日》とするため、いま私たちは、運動の原点に立ち返ってこれからの行程を考える必要があると思う。

日本山岳会が「山の日」運動をスタートさせたのは09年である。当時の宮下秀樹会長が年頭の挨拶で、まず「山の日」の制定運動を提案し、会員各位の理解と協力をお願いしたいと呼びかけた。《このプロジェクトでは、既にいくつかの県で始まっている地域単位の「山の日」を全国に広め、その日を中心に、「山」「山岳」をテーマにした多様

なイベントを企画、推進します。健康的かつ文化的な催しを通じて山に親しみ、山を尊び、敬う風を育てる。山岳への関心を高め、美しい自然を後世に遺そうとするのが目的です》(会報「山」2009年1月号)と意義付けた。

それ以前、日本山岳会は創立100周年事業の柱として中央分水嶺踏査に取り組み、1000人以上の会員が列島の脊梁山脈を手分けして歩いた。宮下さんは、それぞれが森や木や動物など自然界の万物を身近に感じ、共生することの大切さを感じたビッグプロジェクトだったと高く評価し、《山の日プロジェクトは大勢の会員が参加したこの分水嶺踏査の延長線上にある。イベントに参加する人をさらに増やし、活動舞台の裾野をさらに広げ、より多くの人々、国民に、「山」を身近で大切な存在と認識してもらいたい》(要旨)と書いている。

そして、企画・運営に支部、パワーを結集してほしいと強調し、「山の日」運動の活動内容としては①登山活動(市民登山・ハイキング、親子登山、登山教室など)②文化活動(講演・映画・音楽会、シンポジ

ウム、図書・写真・絵画展・スケッチ会など)③環境保全活動(森づくり、里山保全、観察会など)を挙げている。

これらの具体性を持った提案は、そのままいままに通じる内容だと思ふ。企画を推進しイベントを盛り上げるには自治体やメディアの力も必要だという指摘もそのとおりである(付け加えるとすればインターネットの活用くらいか)。

10年4月、山岳5団体が結束した。協議会が発足し、パンフレットを作るなどして運動を活性化させた。前会長の尾上昇さん、現会長の森武昭さんが宮下秀樹さんの路線を引き継ぎ、執行部の支持を得て発展させた。公益法人への移行が「山の日」運動のウエイトを高める側面もあった。国会議員たちが動き、超党派議員連盟が設立された。

運動開始から5年半で得た成果ではある。しかし、なぜ「山の日」が必要なのか。JACの真価が問われるのはこれからだと思う。智恵を出し合い、企画に参加し、より多くの方々の支持と理解を得たところで2年後の「祝日」を迎え、さらにその後へと繋ぎたい。

■支部アンケート

当プロジェクトでは5月末、32の支部に一斉メールで、「山の日」についてどのような取り組みが行なわれているか、検討中を含め情報を提供してほしいとお願いした。6割を超える支部から折り返し回答が寄せられた。

詳しく内容を紹介する紙幅がないのは残念だが、6月8日現在、秋田、宮城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京多摩、山梨、越後、富山、石川、福井、東海、京都・滋賀、関西、山陰、広島、宮崎、熊本などから取り組みの概要が報告され、機運の高まりと広がりを感じられた。企画なし、検討もしていないという支部もあり、温度差はあるが、新たに「山の日」関連のイベントを企画したいという回答がいくつかあり、力づけられた。支部活性化プロジェクトと情報を共有し、今後の展開に活かしたい。

9月には、全支部の支部長、事務担当者が集まって、情報交換と今後の活動方針を検討する会議が開かれるようだ。「山の日」運動もテーマに加えてもらって、支部の積極的な参加機運を高めたい。私たちの「山の日」制定プロジェクト



東京多摩支部が高尾山登山口でビラ配布(6月1日)

クトは、来月開かれる当会の総会と前後して、ひとまずその任を終えることになる。発展的な解消である。今後は、実質的には支部が中心になる当会の活動と、全国「山の日」協議会との連携を効率的に機能させる事業組織が検討されると聞く。

最後にプロジェクトメンバー各位の名前を記して、5年余の労を記録にとどめたい。藤本慶光、西村政晃、江本嘉伸、堀井昌子、萩原浩司、永田弘太郎、渡辺悌二、染谷美佐子、佐藤辰雄、直江俊次、藤山雄一郎、山川陽一、谷久光、成川(順不同)。現在の担当理事は山賀純一である(敬称略)。

Lecture YOUTH CLUB 一般向け登山講習会始まる

理事 山田和人

YOUTH CLUBでは、会員外の登山初心者向けに安全で楽しい登山の指導を開始した。

第1回は、「登山計画と読図」というタイトルで5月16日に机上講習、5月24日に実地講習を実施した。

机上講習には15人が参加し、地形に関する講義と地形図を使った演習を行なった。参加者は実地講習で歩くルート周辺の尾根、谷、鞍部などを地形図から読み取り、熱心に実習に取り組んでいた。

実地講習は山梨県の扇山で実施



机上講習会での演習の様子



実地講習・扇山の山頂にて

し、5人が参加した。机上講習および自宅で完成させた尾根線、谷線の入った地形図を持ち、ルート地形を確認しながら歩いた。ルート中には地形図と登山道が異なっている箇所もあり、現在地確認を繰り返しながら5時間ほどの工程をこなした。頂上からは富士山も姿を見せ、楽しい登山となった。

この活動は公益事業の一環という位置付けであると同時に、若年層を会員に取り込むことも目指している。第1回の参加者からはすでに入会希望者も出た。

2014年度の登山講習会スケジュール

テーマ	机上講習			実地講習		
	開催日	場所	講師	開催日	場所	講師
登山計画と読図	5月16日(金)	本部会室	山田和人	5月24日(土)	扇山(大月市)	山田和人
山の食料と装備	6月20日(金)	本部会室	大槻利行	6月28日(土)~29日(日)	大室山(丹沢)	大槻利行
山と天気	7月8日(火)	アースプラザ	猪熊隆之	7月12日(土)	大菩薩嶺	東 秀訓
小屋泊とテント泊	8月1日(金)	本部会室	飯田邦幸	8月9日(土)~10日(日)	徳沢園(上高地)	飯田邦幸
山と医療	9月9日(金)	本部会室	野口いづみ	—	—	—
山と安全(レスキュー)	9月26日(金)	本部会室	川瀬恵一	10月4日(土)	荷田子付近(あきる野市)	川瀬恵一
山の記録とGPS	11月中旬	本部会室	山田和人(予)	11月下旬	未定	山田和人(予)
雪山オリエンテーション(1)	1月16日(金)	本部会室	佐藤 守	2月21日(土)~22日(日)	玉原湿原~鹿俣山(沼田市)	佐藤 守
雪山オリエンテーション(2)	—	—	—	3月14日(土)~15日(日)	中山展望台(八ヶ岳)	佐藤 守

今後の講習会予定は、6月「山の食料と装備」、7月「山と天気」、8月「小屋泊とテント」、9月「山と医



療」、10月「山と安全(セルフレスキュー)」と続く。詳細は当会ホームページの右下にある「登山講習会」をクリックして確認できる。59歳以下であれば参加可能なので、登山に興味を持っている身近な方々に、ぜひお勧めいただきたい。

Official mailing

「日本山岳会だより」100号に

永田弘太郎

8年前の2006年4月28日に

創刊したメールマガジン「日本山岳会だより」は今夏100号を迎えます。当初300人程度の配信でしたが、現在は約1500名に増えました。会員の30%弱になります。

当初は情報を集めることにも苦慮していましたが、徐々に有用性が認められてきたようです。事務局で作成した計報も配信するようになりました。

記載事項を間違えるなど、これまでいろいろとご迷惑をおかけしてきましたが、みなさまのおかげでどうにか継続することができています。最近担当も新しくなり、当会の情報だけでなく、有益な山の情報を入手する余裕も出て参りました。今後ともお付き合いのほど、よろしくお願い致します。

なお、100号を記念して、メール上でささやかなプレゼントを計画しております。

まだメールマガジンを受信されていない会員の方は、この機会に

ぜひお申し込みください

(申込先 jac-mhaga@jac.or.jp)。

(デジタルメディア委員会)



来月になれば、梅雨明けと同時に夏山シーズンがやって来ます。シーズン初めは残雪が多かったり、登山道が十分に整備されていないこともあるため、不安定なコンディションも続きます。お気をつけて、よい夏山シーズンをお過ごしください。

在学山岳部・WV部
アンケート協力校一覧

日本山岳会会報「山」5月号巻頭

記事は、大学山岳部の現状についてでした。50以上の全国各大学山岳部・ワンダーフォーゲル部に依頼した中から、お返事をいただきました。

アンケートに協力していただいた大学のリストをこちらに掲載します。

このほかにも直接・間接的に多くの方々にお世話になりました。改めてアンケートへのご協力をいただき、ありがとうございます。

「アンケート協力校」

- ・青山学院大学
- ・学習院大学
- ・神奈川大学
- ・九州大学
- ・京都大学
- ・神戸大学
- ・国際基督教大学
- ・芝浦工業大学
- ・信州大学
- ・専修大学
- ・千葉大学

- ・中央大学
- ・東京農業大学
- ・同志社大学
- ・東北大学
- ・獨協大学
- ・一橋大学
- ・武蔵野大学
- ・明治大学
- ・横浜国立大学
- ・早稲田大学

(あいうえお順)
*国際基督教大学はワンダーフォーゲル部、それ以外は山岳部

Nepal Himalaya Open

ネパール・ヒマラヤの新規解禁峰と登山料
金改定

海外委員会 竹花 晃

ネパール政府の文化・観光・航空省(以下、観光省)は2014年5月21日に、登山解禁峰(オープンピーク)の追加と一部除外を発表した。また、5800m以下の山はトレッキング・ピークとして開放することになった。

以下に概要を紹介する。

まず、観光省による従来のオープンピークは326座あったが、そのうち16座が除外され、310座となった。

除外の理由は様々のようだ。例えば、同じ山が異なった名前前で二重登録されていた。ダウラギリの近くの比較的よく登られている、ダンプスピーク(6012m)がタパピークとしても登録されていた。あるいは、ゴークョ・リのように登山としては容易すぎるために除外されたものが4座ある。

今回解禁されたピークは104座であり、観光省によるオープンピークは合わせて414座となった。新規オープンピークにはすべて

山系・地域・緯度・経度が記載されているため、在来の一覧のよくな曖昧さは少ない。新たに命名された山も多く、地図には山名が表示されていないものも多い。新規解禁峰のため、基本的には未踏峰とも言える。

一部の解禁峰を紹介すると、標高の高いものとしては、ヤルンカン・ウエスト8077m、カンチエンジュンガ・ノース7938m、テンジン・ピーク7916mなど、7000m以上の山は、8000m級の1座を含め10座ある。

解禁峰の多くは6000m級であるが、5000m級も3座ある。人名やUIAAなどの団体名を付けたピークも多く、先のテンジンピークのほかに、ヒラリー・ピーク7681mや、アンナプルナ山域にはエルゾーグやラシュナルの名前を冠した山もできた。

余談であるが、日本人に馴染みの深いピーク29は、ハルカ・グルン・ピークと命名されている。こ

れはヘリの事故で亡くなった、ネパールの有名な地質学者であった博士を記念したものである。

観光省の発表の3つ目として、5800m未満の山はトレッキング・ピークとして開放されることになった。

このトレッキング・ピークは登山許可や登山料金は不要で、トレッキングとして自由に登れるカラパタルのようなものと言えよう。ここでのトレッキング・ピークは、

ネパール山岳協会(NMA)が管轄・許可する、アイランド・ピークやメラ・ピークなど33座のNMAピークとは異なる。NMAピークは、NMAに申請し登山料やゴミ処理のデポジットを支払う。トレッキング許可で登れる易しい山と誤解をしている人が多いが、トレッキングとは全く別物の登山である。またクスムカングルや、シングーチュリなどのように簡単に登ることができない山も多い。

NMAピークにも3座もあつた5800m未満の山は新たなトレッキング・ピークに移行した。

14年2月に登山料金の改定が発表され、15年1月1日より施行されるので併せて紹介する。

料金区分は、特定の山または標高区分別に、シーズン別のドル建てとなっている。シーズンは春・秋と冬・夏の3つに分類され、以下その順番で一人当たり金額を記す。

エベレストの南東稜は、11000、5500、2750\$。南東稜以外のエベレストは、10000、5000、2500\$。エベレスト以外の8000m峰は、1800、900、450\$。7501〜7999mは600、300、150\$。7000〜7500mは500、250、125\$。6501〜6999mは400、200、100\$。アマドラムは400、400、200\$。6500m以下は250、125、70\$。一隊当たりの人数は15人以下とする。

一隊当たりの全体のロイヤリティのみ規定されていたところに比べると、一人当たりの料金制となり、少人数の場合割安となっている。力のあるパーティならば、安い料金区分の時期を選ぶこともできる。

登山料金以外に保険金の額が規定され、14年1月から適用されていたが、14年の雪崩大量遭難を受け改定される見込みである。



古屋学而(ふるや・がくじ)

1934年 山梨県甲州市勝沼に生まれる。
1952年 日川高校卒業。山岳部に在席。
卒業と同時に山岳部OB山岳会「からまつ山岳会」に入会。
1956年 千葉大学園芸学部卒業。
1962年 日本山岳会入会
1963年 からまつ山岳会会長に就任
(～2014年)
1993年 山梨県山岳連盟副会長に就任
(～2002年)
1994年 日本山岳会山梨支部支部長に就任
(～2010年)
1994年 全日本スキー連盟監事に就任
(～2002年)
2014年5月1日逝去 享年80
からまつ山岳会会員、日本山岳会永年会員、
山梨県山岳連盟評議員

4月22日、古屋学而さんに高室陽二郎さんの奥様の訃報を知らせる電話を入れた。話す声に少し張りがなかったもので、「体調は如何?」と聞いたら「大丈夫元氣だ」と返ってきた。その9日後の5月1日に学而さんが逝ったとの連絡を受けた。あまりに突然で、あつけない別れにしばらくは信じられ

山梨支部再建に努力した 古屋学而さん

内藤順造

なかった。

学而さんは勝沼の旧家「原茂園」に生まれた。葡萄を手広く栽培して、ワイン醸造も手がけていた。大業を卒業するとすぐに醸造業の構築に励み、今では「原茂ワイン」は国内品評会で毎年優秀賞の金賞を受賞するほどになった。山梨県山岳連盟や山梨支部の懇親会や催しには必ず自慢のワインを持参し、みんなに振る舞っていた。自宅の観光葡萄園で栽培している葡萄は見事なでき映えて、時期には我が



家にも送ってくれた。

学而さんは多才な方で山梨の登山界、スキー連盟、地元勝沼のこごと、多方面に大きな足跡を残した。山岳では1940年に山梨県山岳連盟初の海外遠征隊「訪華友好登山隊」の隊長を務め玉山、中央尖山を登頂し、岳連の海外登山のさがけとなった。からまつ山岳会の会長を63年から今日まで務め、その間、岳連副会長に5期10年間就任、県山岳界に大きく貢献した。また、スキー関係では山梨県スキー連盟の理事長、副会長を歴任し、94年からは全日本スキー連盟の監事を4期8年間務められ、スキー界でも多大な貢献をした。

日本山岳会の永年会員でもある学而さんは、山梨支部長を7期14年間と永く務めた。

山梨支部は73年ごろから89年ごろまでの間、活動が全く停滞した時代があった。90年に学而さんを中心に主なメンバーで支部再建がスタートし、全国支部大会の増富開催(93年)が弾みになった。94年に支部長に就任した学而さんは熱意ある委員たちのサポートを受け、順次各事業に取り組んだ。

創立90周年中部ブロック記念式

典(95年)、フォーラム「南アルプスの将来像」の山梨県知事への提言(97年)。日本山岳会100周年記念事業分水嶺踏査の実施(2004年)。支部独自の100周年記念事業「山の博覧会」の開催(05年、13年)。年数回の支部山行や他支部との交流会への積極参加など、以前とは見違える活動内容になった。これも再建時から熱心に取り組んできた古屋支部長の果たした役割は大きい。特に「山の博覧会」は今年で10回を迎え、毎年大勢の来場者で賑わっている。公益社団に移行した日本山岳会の公益事業を先取りした内容で、その苦勞も称えたい。

シーズンになると学而さんから何度もスキー行きを誘われた。私の山スキーは自己流で褒められた滑りではない。学而さんは国体に数回出場した本格的なスキーで当然素晴らしい腕前。一緒に滑っても足手まといは明白で、簡単に返事ができなかった。このような事態になってしまうと、一度、白馬でも一緒に滑りたかったと残念で仕方がない。

学而さん、ありがとうございました。心からご冥福を祈ります。

から下は、ウェストン祭のところで残雪の多いときは長い雪渓が続いて、雪に慣れた者には快適な下山路を提供し、1時間もすれば上高地の平地に到着できますが、慣れない人には危険な所となります。

*

6月1日の碑前祭は10時から始まり、「第1部式典」司会は財津達弥、塚原賢勝・信濃支部長の開会挨拶、安曇小学校4年児童2名による献花、安曇小学校4、5、6年生児童25名による「ウェストンの歌」の献歌、黙祷1分間。その後、森武昭・日本山岳会会長挨拶、来賓祝辞は松本市市長代理・坪田明文副市長、詩の朗読、尾崎喜八の詩「碑前にて」の朗読が森永貴子支部員、リコーダー演奏、「エーデルワイス」、「グリーングリーン」合唱が安曇小学校・草田由香里先生によって行なわれました。

「第2部記念行事」記念山行報告を徳本峠越えリーダー・東英樹が、記念講演「日本アルプスから世界の山へ」と題して花谷泰広が行ない、閉会となりました。記念講演の講師・花谷泰広は、今、日本を代表する若手クライマーです。若く、素直な語り口は聞く人を惹き

付けました。

11時30分、ウェストン祭の式典を終え、12時から西糸屋山荘での午餐会となりました。午餐会は西糸屋山荘に宿泊する信濃支部員を中心に、山研に宿泊の新人会員(東海支部11人、四国支部5名、千葉支部3名)、来賓を含め80名の出席者でした。恒例の西糸屋山荘カレーライスをいただき、解散となりました。松本市、環境省、上高地町会、上高地旅館組合、自然公園財団の方々にもご参加いただきました。

恒例となつてゐる第68回ウェストン祭記念品は、穂高連峰を描いた金光義明先生(信濃支部会員・日本水彩画会会員)の手拭いと、シナノキンバイの木彫ブローチ(上兼力三先生)でした。これらの記念品は、6ヶ月前から制作にあたっていたいただいております。信濃支部支援団体は約50団体、この対応を中心にウェストン祭は細部まですべてが支部会員によつて運営されますので、大変な労力を必要とします。今回は成功裏に終わったと評価しております。

(第68回ウェストン祭実行委員長
信濃支部・平林節生)

『山岳』第百九年(2014年)発刊は7月下旬予定

お待たせしておりますが、機関誌『山岳』第百九年(2014年)の発刊は7月下旬を予定しております。以下のような構成で、会員の皆様にご満足いただける、充実した内容になっております。もう少しお待ちください。

〈第百九年 目次〉

〔記録〕

アウトライアー〈ジャナク・チュリ〉東峰初登頂(2013 青山学院大学山岳部アウトライアー登山隊)

中国四川省・横断山脈登攀隊報告

(慶應義塾大学体育会山岳部プロジェクト100)

〔調査・研究〕

富士山におけるスラッシュ雪崩と積雪のスラッシュ化による遭難事故

(安間 荘)

青海—四川4500km、2013

年6月 (中村 保)

木暮理太郎と『山岳』編集

(児玉 茂)

〔読物〕

憧憬のヒマラヤ登山——定年退職後に挑んだ私のふみあと

(南井英弘)

京大学士山岳会・高橋健治と妻口

ーザ・レッサの生涯

(緑爽会シンポジウム)

スイス人岳友の自然回帰——その生涯 (岡澤祐吉)

若き茨木猪之吉の肉筆絵葉書発見 (関塚貞亨)

*

図書紹介

追悼

会務報告

支部の活動報告

委員会の活動報告

山岳図書目録(2013年)

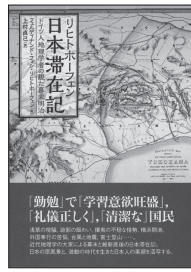
(『山岳』編集委員会)



図書紹介

フェルディナンド・フォン・リヒト
ホーフェン著、上村直己訳

『リヒトホーフェン
日本滞在記―ドイツ人地理
学者の見た幕末明治』



2013年12月発行
九州大学出版会
A5判
定価3400円＋税

本書の著者リヒトホーフェン（1833～1905年）はドイツの偉大な地理学者、探検家である。その著書「China」第1巻の後半部でザイデンシュトラッセン（絹の道）という言葉が使われている。この絹の道という言葉が、我が国では彼の愛弟子であるスエ・ティンの著作の題名に「シルクロード」という響きのいい翻訳が用いられている。これが世間で広く流布する一因になったのだろう。

また彼の甥に当たるマンフレート・フォン・リヒトホーフェンは第1次世界大戦の撃墜王レッド・バロン（赤い男爵）として知られている。

本書は第1部の使節団旅行日記1860/61と第2部の第2回日本滞在記1870/71とに分かれている。

第1部はプロイセン通商代表団の学術部員として来日、5ヶ月間滞在し、幕末の横浜、江戸およびその周辺の風俗、風景を巧みな描写で詳細かつ克明に活写している。江戸の宿泊所は増上寺近くの赤羽根接遇所である。若冠27歳の青年の観察眼の鋭さは後年、近代地理学の泰斗と呼ばれるようになる才覚を見るのである。横浜の遊女屋、岩亀楼については、第2部にも出てくるが、公正な温かい眼で観察されていると思う。幕末攘夷の不安な情勢の中にあっても彼の観察

眼の衰えはない。日本を去って、ドイツには帰らず東南アジア、北米を巡った後、約3年間を中国で過ごし研究調査を行なう。その成果が「China」全5巻という膨大な著作である。このうち2冊の邦訳本がある。

そして1870年夏、明治になった10年振りの日本再訪を果たす。このときの6ヶ月の滞在日記が第2部である。彼はまず富士山と大山に登る。そして東京に帰り旅行許可を取って、甲府を経て松本に出る。さらに名古屋を経由して神戸から船で長崎に向かった。長崎から南下し鹿児島に達し、高千穂峰に登る。「頂上の一歩高い場所」に日本にとって神聖なものがある。緑色の奇妙な形をした銅の棒「天逆鉾」である。……と記している。天孫降臨の神話まで彼が知っていたのには驚きである。そして長崎から日本を離れていった。

本書にある詳しい訳注は力作で、本書を補完し大いに理解を助けて貰える。最後に当会図書室にある著者の訳本を紹介しておく。

「支那（一）」―支那と中央アジア
昭和17年発行。「支那（五）」―西南支那
昭和18年発行。「支那旅行日

記、上巻」昭和18年発行。関連書「リヒトホーフェン傳」ヘーデン著、昭和16年発行。（田村俊介）

日本山岳会四国支部・監修
『四国の山歩き ベスト50』



2014年3月発行
徳島新聞社刊
A5判 150頁
定価1600円＋税

最近『四国の山歩き』という本が出た。日本山岳会四国支部が監修したもので、カラー刷りの地図や写真を採用した、美しい本になっている。

第1章「歩いてみたい四国の山」では四国の主な山50座を選び、登山道の最新情報を取り入れて、初心者でもわかりやすくガイドしてある。ポイント間の所要時間と登高差をグラフに表わして、全体の概念が把握しやすくなっているのも親切だ。

登山の第一の関門は登山口を探すことだが、四国の山ではとかく公共の交通機関は使にくい。やはりマイカー使用が中心になる。この本ではそれを前提に車道の走行経路を説明しているので、登山口

までのアプローチも分かりやすい。従来のガイド本と違うのは、副題にあるように「山を歩いて元気になる」ということを基本に、安全で楽しい山登りを強調していることだ。楽しくなければ山登りではない。楽しければこそ体力も向上し、健康増進にも役に立つ、という趣旨である。苦しいだけの山登りは昔の話である。

第2章「元気になる山歩きのコツ」では登山の準備、服装、持ち物、歩き方、歩行ペースなど基本的な事項をわかりやすく説明してある。さらに進んで健康面での登山の効用について「4〜5時間山を歩けば、健康維持と肥満改善に必要な1週間分の運動量を楽々クリアできる」とくれば、メタボな中年には、ますます山歩きが嬉しくなることだろう。

さらに嬉しいのは「加齢に伴う認知機能は、山登りをしない人より登山者の方が優れている」という検査結果が出ている」ということだ。認知症予防に効果があるなら、家族も喜んで山に送り出してくれるだろう。

それでも山でトラブルは起こる。そういうときどう対処するか、に

ついて最後に説明してある。楽しく登るということは、細心の注意を払って安全に登ることと一体でなければならぬ。

ひところは中年が席卷していた山にも、最近は若い人が戻ってきた。いわゆる「山ガール、山ボーイ」たちである。若いからといって油断せず、無理をせず安全登山に徹してほしい。

まして中年登山者には、もう一度この第2章を読んで、基本に立ち返り、事故のない山歩きのための復習をしてほしい。

最終ページに記載してある「快適・安全な山歩き12カ条」の一つ一つが、山登りの憲法みたいなもの。しっかり守っていつまでも登山を楽しみたいものだ。

(宗實慶子)

松尾良彦・著、福岡登高会・編 『写真と年表で見る九州登山史』



2014年3月発行
権歌書房刊
B5判192頁
定価1900円＋税

松尾良彦さんは1977年、日本山岳協会主宰・K2登山隊に西

日本新聞社から報道隊員として参加した経験があり、その後、新聞社では運動部長、北九州支社編集長、論説副委員長などを歴任された。いわば、書くことについては専門の登山家である。今回の編者である福岡登高会の海外遠征の報告書も、いつも読み物風にまとめていたでいた。その松尾さんが、この著は自らの「山の卒業論文」であるといって届けてくださった。卒業にはまだ早いとは思いますが、これが今わかる「九州登山史」の集大成であることには間違いがない。

前著にあたる『九州の岳人たち―その登山史』『山と人―百話―九州の登山史』の執筆にあたり集めたデータに、新たに発掘した多くのデータを加筆。「写真で見る九州登山史」と「九州登山年表」が時代を追って交互に書かれており、その記録は約1800にも及ぶ。後半には「九州の山」主な本と文献史」と「九州の岳人」のリーダーたち」も綴られている。特に九州の登山熱の広がりが世界の中で、国内の山岳界の中で、どのように展開されてきたかにも注目。また、登山中のどんな遭難事故で、どれ

だけの尊い命が失われたかにも目を向けられている。

世界の、国内の山岳界が動く中で、九州の山岳界がどのように歩んできたか、歴史をたどるとそこにいるいろいろなものが見えてくるだろう。その「山と人」の記録がこれだけ一冊に集成できたものはほかにはない。あれば良いと誰もが思っても、誰も手を付けなかった地方の登山史の貴重な資料が、今ここにまとめられたことに、心から感謝したい。

(渡部秀樹)

N 東北 S 西南

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

ロングトレイルへの想い

いつも「なぜこの道は次の山に繋がっていないのか、繋がっていないのか……」。そんなことを思っていたときに思い出したのが、TVで放映された、終生忘れ得ない感動を受けたアパラチアン・トレイル。

その瞬間「これだ、これこそ探し求めていたものだ」と思ったことが、今日の活動の源になっていると思います。

昨年6月、広島支部の定例山行会的时候、夕食後、車座になったの自己紹介の機会に、支部長がおられたこともあり「広島にロングトレイル(LTを作ろう)」と思い切った提案しました。しかし、この提案が運命のいたずらなのか、宿命かと思えるほどの展開になるとは、このときは知る由もありません

んでした。ところがなんと、山行帰りの翌日に届いた会報「山」に、LTが巻頭記事として掲載されているではないですか。改めて私の夢や想いを支部長に伝える機会を持ちました。

支部長の理解を得たことで、7月には私の夢や想いに即賛同してくれた会員と、街道トレッキングを定例山行会にされた会員の3人で「DHTロングトレイル研究会」を立ち上げました。単なる夢や憧れから実現化への道を歩み始めることとなり、3人で定期的な勉強会を設け、10月には日本のLTの元祖「信越トレイル」(長野県・新潟県)へ行き、LT体験と信越トレイルの昨日、今日、明日を木村事務局長からお聞きしました。

その体験がベースとなって現在の「LT研究会(同好会)」となり、アドバイザーの支部長と10人の会員が毎月の定例勉強会とLT踏査



国東半島峯道ロングトレイルの中山仙境

すLTかと、今年9月の全踏破に思いを膨らませています。また、3月の峯道トレイルでは中山仙境の絶景や、世界農業遺産に指定されるほどの豊かな自然や田園風景の素晴らしさに心打たれ、4月の高島トレイルでは大自然の奥深さ、豊かさ、難易度の高さ、厳しさに感動した体験は、我が「Xtrail」に活かされるものと思っています。

5月31日〜6月1日に国東半島で開かれた日本ロングトレイル協議会の講演会、報告会、パネル・ディスカッションに参加して、先駆者の話を聞くのが一番と感じました。観光庁の「観光立国実現とロングトレイル」の話は、行政の政策、方向性を知り、時代の到来を実感し、信越LTの木村事務局長の「オープン後は草刈りの日々。地元との協力なくしてLTは成り立たない」の言葉を深く心に刻みました。夜の交流会は「LT時代の幕開けの興奮と熱気」に包まれており、LTへの想いをさらに強くし、我が夢を「夢はまた夢の中」で終わらせないためにも、この2日間の体験がLT開設へのエネルギーになったと確信しています。

(広島支部・田川宏規)



平成26年度第2回(5月度)理事会 議事録

日時：平成26年5月14日(水)19時～
21時10分

場所：日本山岳会集会室

【出席者】森会長、節田・黒川・古

野各副会長、高原・吉川・勝
佐藤各常務理事、大槻・勝

山・直江・野口・山田各理
事、吉永・浜崎各監事

【欠席者】落合・川瀬・山賀各理事
【オブザーバー】柏編集人

【審議事項】

1・平成25年度事業報告書・決算
(案)について

平成25年度事業報告書・決算
(案)について、別添資料により担
当理事が説明し詳細に検討された。

〔賛成12、反対なしで承認〕

2・埼玉支部創立5周年記念ネパ
ール遠征計画の旅費の取り扱いに
ついて〔再審議〕

遠征計画における参加隊員の旅
費については、手続き上での寄付
の取り扱いを行わないことを確
認した(3月度理事会決定の一部
を見直し変更)。

〔賛成12、反対なしで承認〕

3・支部事業補助申請(東京多摩
支部)について

東京多摩支部からの初級登山教
室運営およびリーダー育成に関す
る支部事業補助申請(別添資料)
に対し、20万円の補助を行なう。

〔賛成12、反対なしで承認〕

4・秩父宮記念山岳賞審査委員か
らの辞任願について

秩父宮記念山岳賞審査委員1名
からの辞任願および後任は平成26
年度配置しないことについて担当
理事が説明し、詳細に検討された。

〔賛成12、反対なしで承認〕

5・入会希望者について

35人の入会希望について別添資
料により担当理事が説明し、詳細

に検討された。

〔賛成12、反対なしで承認〕

6・支部長交代について

支部長の交代答申が以下のとお
りあり審議された。

〔信濃〕現：飯村富彦(8768)

新：塚原賢勝(6473)、〔山梨〕

現：遠藤靖彦(6653)新：深沢

健三(10920)、〔熊本〕現：工

藤文昭(8190)新：松本莞爾

(8411)。

〔賛成12、反対なしで承認〕

【協議事項】

1・日本山岳会への寄付制度など
の検討について

日本山岳会が関係する海外登山
隊の類型と参加者等の寄付の受け
入れ基準等について協議を行ない、
引き続き検討していくこととした。

2・海外支部(ネパール)の設立と
運営について

ネパール在住の本会会員から要
望のあった海外支部設立について、
国内支部との関係、設立、運営上
の課題等について協議を行なった。

【報告事項】

1・寄付金・助成金受け入れ事前
申請および受け入れが各1件報告

された。(吉川)

2・口座振替制度導入に伴い、来
年度(平成27年度)からの利用を勧
奨する文書を、5月下旬に会員に
送付する。(佐藤)

3・110周年記念事業に関する
旅行者への説明会を4月21日実
施し、参加5社に対し企画提案を
提出するよう依頼した。(節田)

4・110周年記念事業実行委員
会内の支部海外登山、学術調査登
山、極限探究登山、旅行者募集
企画の4部門に関して、企画審査
を行なう小委員会を設置し、各部
門リーダーを決定した旨の報告が
あった。(黒川)

5・「山の日」制定に伴う「国民の
祝日に関する法律の一部を改正す
る法律案」の国会審議日程等につ
いて報告された。(森)

6・YOUTH CLUBでガイ
ドを雇用する際の選定内規につい
て説明があった。(古野)

7・上高地山岳研究所における平
成26年度の管理人雇用契約と、平
成27年度の管理人予定者について
報告があった。(大槻)

8・日本山岳会主催行事にかかる
賠償責任保険の契約更改を行なう。
(高原)

9・「寄付のご案内」のパンフレットを作成し、会員・非会員を問わず寄付をお願いする。(吉川)

10・第1回評議員懇談会を5月13日開催し、貴重な意見をいただいた。(高原)

11・国土地理院から推薦依頼があった「電子国土賞2014」につき、HP上で推薦の募集を行なう。(佐藤)

12・「日本山岳会のしおり(2014年版)」を作成したので、新入会員オリエンテーション等で使用してもらいたい。(佐藤)

13・東海支部から「第2回夏山フェスタ」名義後援申請があり承認した。(高原)

14・日本山岳ガイド協会から公開講座「安全のための知識と技術」名義後援申請があり承認した。(高原)

15・栃木県から山の日関連シンポジウムへの名義後援申請があり承認した。(高原)

16・北海道支部のオホーツク・太平洋分水嶺踏査が完遂した。(高原)

17・入会金の一部還元に用いる支部所属新入会員数について報告があった。(吉川)

18・平成26年度末会費滞納除籍予

定者リストを配布。(高原)

19・会報「山」5月号の発行について報告があった。(柏)

【連絡事項】

1・『岳人』発行業務取り止めについて(東京新聞)

2・残雪期における至仏山の利用および登山道閉鎖について(尾瀬保護財団)

3・平成26年度山小屋等関係者打合せ会議の開催について(中信森林管理署)

【今後の予定】

1・新入会員オリエンテーション
7月5日(土)13時

2・同好会連絡会 7月7日(月)19時

3・第30回東北・北海道地区集会(福島支部主管) 7月6日(日)7日(月)

4・上高地ウェストン祭 6月1日(日)

5・内閣府へ平成25年度事業報告書・決算書提出 6月27日

ルイム日誌 5月

7日 常務理事会 YOUTH

CLUB

8日 フォトビデオクラブ スケッチクラブ

9日 九五会

12日 総務委員会 スケッチクラブ スキークラブ

13日 評議員懇談会 山岳研究所 運営委員会 図書委員会 山岳地理クラブ 110周年記念事業実行PT 二火会

14日 理事会 集会委員会 山想倶楽部

15日 科学委員会 YOUTH CLUB 休山会 高尾の森づくりの会

16日 スケッチクラブ YOUTH CLUB

17日 フォトビデオクラブ 山の自然学研究会

19日 フォトビデオクラブ 総務委員会 資料映像委員会

家族登山普及WG

20日 支部活性化PT 00会 01会 スキークラブ

21日 三水会 青年部 つくも会

22日 緑爽会 学生部 集会委員会 公益法人運営委員会

26日 YOUTH CLUB

27日 デジタルメディア委員会

28日 遭難対策委員会 海外委員会 麗山会

29日 緑爽会 YOUTH CLUB

30日 B みちのり山の会 山遊会 YOUTH CLUB 高尾の森づくりの会

31日 土曜会

会員異動(5月分)

物故

木下是雄(2563) 14・5・12

田中昭男(3724) 13・5・1

長尾登之助(3765) 11・11

西川元夫(4887) 14・5・1

古屋学而(5499) 14・5・1

寺崎吉彦(6091) 13

青木伸雄(6320) 13・10

野沢広作(6374) 13・11・24

吉田 薫(7802) 14・3・8

兼岩良保(10678) 14・4・30

神原定子(10822) 14・2・28

山家敏雄(12512) 14・4・4

穴田和三(13968) 14・5・10

退会 浅野清彦(3245) 関西

浅野初子(3316) 関西 順天堂大学医学部山岳部(4885) 練木允雄(5299) 千葉 降旗 孟(5977)

5月来室者 517名

伊藤 茂(6837) 岐阜
 中村小一郎(8094) 東京多摩
 岩坪吟子(8403) 京都・滋賀
 佐山邦彦(8431)
 船橋山百合の会(9659)
 緑川謙二(9741)
 所 彰(9785)
 竹内研一(9809)
 東山佐紀子(10301)
 酒井行男(10398) 越後
 久米 實(10606) 静岡
 鈴木章久(11075)
 所ミヨ子(11279)
 藤内英夫(11883) 北海道
 張 江援(12043)
 大悟法雄作(12110) 千葉

吉田和夫(12411) 京都・滋賀
 天竺桂廣義(12862) 静岡
 佐藤栄治(12868) 秋田
 松尾武夫(12872) 東京多摩
 松元正明(13093) 宮崎
 西出恵一(13166) 石川
 民田 勇(13196) 岐阜
 大貫俊彦(13245)
 田中 忍(13302) 福井
 千葉英光(14452) 岩手
 小林 正(14600)
 櫻井靖彦(14725) 東海
 森 浩(14906) 四国
 五藤順子(14907) 四国
 出口裕規(15210)
 鈴木三恵子(15216)



◆白神山地ブナ林再生事業と自然観察会

青森支部
 世界遺産・白神山地の「バッファゾーン」周辺の生育不良杉林地をブナ林に再生するための除伐や植樹などの作業、および原生ブナ林の

観察会を行なう。寝袋、食料必携。テントはこちらで用意可。

日程… 6月28日(土)～29日(日)
 集合… 28日8時、JR弘前駅城東口および10時30分、奥赤石

林道ゲート

解散…29日15時、奥赤石林道ゲート17時、弘前駅送迎可
経費…なし(食料、保険は各自持ちで)
定員…50名

申込…ハガキかFAX(0172-447237) かメール

で須々田秀美宛(〒036-0103
平川市本町北柳田96-2

✉ h.susuta@gmail.com

◆第10回山の博覧会のお知らせ

山梨支部

山梨支部では「第10回山の博覧会―山を知ろう 山へ行こう―」を開催します。

「山の博覧会」は山梨県の「やまなし山の日」および山岳5団体が推進する「山の日制定プロジェクト」の関連事業でもあります。日本山岳会創立100周年を記念して2005年に第1回を開催して以来、毎年行なってきました。今回はその最終回として7月5日(土)に開催します。毎回多数の方々が講演会に参加しています。今回は船村徹氏の講演もあります。

日時…平成26年7月5日(土) 10時
～15時20分

会場…山梨学院メモリアルホール

(甲府市酒折2-4-5)

入場…無料

内容…講演①「登拝修行 山で神

仏を感じる時」清雲俊雄氏

(甲州市塩山・放光寺住職)、②「青木ヶ原樹海 蒼

き千年の森」山梨日日新聞

取材班、③「山の日」と「男

の友情」船村徹氏(作曲家、
日本山岳会会員)

そのほか山梨百名山登拝修行記

録写真などの展示、登山用品の展示販売など。詳細は山梨支部のホームページをご照会ください。

申込…山梨学院生涯学習センター

ホームページ <http://www.ygu.ac.jp/learning/> から

もできます。

◆第46回新入会員オリエンテーション開催のお知らせ

総務委員会

2013年9月から2014年

5月の期間に入会された会員を対象に、オリエンテーションを開催いたします。当会の組織や活動状況、図書室や山岳研究所などの施設の説明、委員会や同好会の紹介、日本山岳会グッズの販売などを行います。また終了後、懇親会を開催いたします。これから始まるクラブライフを楽しく過ごすため

にもぜひご参加ください。

期日…7月5日(土)13時30分～18時

30分

場所…日本山岳会ルーム(東京都

千代田区四番町)

問合…総務委員会 担当 武藤篤

生 ✉ mutoh@emc.jp

*対象者には郵送にて詳細をお送りしております。

◆立山の見どころ丸」と探求ツアーの案内 集委員会

学術的にも認められた立山の「氷河」を雄山山頂から確認します。

秩父宮記念山岳賞を受賞した富山

県立立山カルデラ砂防博物館の学

芸員が同行し、解説します。また、

一般には立ち入ることのできない

立山カルデラに入る見学会への参加

を計画しており、かつては禅定

登山で賑わった立山温泉なども見学

する予定です。

日時…8月26日(火)～28日(木)

日程…26日15時、立山駅集合(立山

山麓で宿泊)

27日8時発一室堂一浄土

沢園谷一ノ越一雄山山

頂一ノ越一室堂一立山

山麓泊

28日8時、立山カルデラ博

物館一トロッコを利用し
立山カルデラヘーカルデ

ラ内見学一帰路はバスにて立山駅17時ごろ解散

費用…3万円(2泊6食、域内交通費、保険料)

定員…20名

申込…8月3日(日)までに集委員会 勝山康雄まで。

*申込者へ詳細案内を送ります。

TEL & FAX…048-294-9646

✉ syukai@jac.or.jp

◆北アルプス・裏銀座コース一笠ヶ岳縦走 集委員会

北アルプス全山縦走シリーズ第

3回。北アルプスのクラシカル・

コースである裏銀座から秀峰、笠

ヶ岳まで縦走します。

日程…9月4日(木)～8日(月)

集合…4日17時、信濃大町駅周辺

行程…高瀬ダム一烏帽子小

屋一野口五郎岳一三俣山

荘一双六小屋一秩父平一

笠ヶ岳山荘一槍見温泉

解散…8日14時ごろ槍見温泉にて

費用…4万2000円程度(4泊分)

募集人数…15名

申込…8月10日までに清登緑郎宛

TEL 090-9325-8258

✉ syukai@jac.or.jp

*参加者には詳細案内を送ります。

日本山岳会蔵資料紹介 No.12

[資産番号] 10500～10508
 [資料名] マナスル登山隊装備など
 [部門名] 登山用具
 [寄贈者] 日本山岳会
 [受入日] 1956年、1985年



① マナスル頂上に置かれたピース缶



② カラビナとハンマーとロックハーケン



③ アイスハーケン



④ シュラフ

資料室には海外遠征で実際に使用した登山用具、備品なども残されている。今号では、1956年のマナスル隊に関しての装備やエピソードある物品などを紹介する。

① マナスル頂上に置かれたピース缶。これは1956年5月9日、初登頂した隊員の一人(加藤喜一郎)が記念に頂上に埋めたもの。それを1985年12月、カモシカ同人隊の山田昇らが見つけて持ち帰り話題となった。落雷により穴の開いたピース缶の中にはJACの文字の入ったマッチ箱と、マナスルの石が入っている。マッチ箱には第3次マナスル隊全員(横有恒隊長ら12人)の名前が鉛筆で記されており、現在も確認できる。詳細は1986年1月1日付の朝日新聞に報じられており、記憶にある会員も多いことだろう。

② カラビナとハンマーとロックハーケン。ハンマーのシャフトは木製で長さ25.5cm、鉄製のヘッドは11.5cmほどで「好日山荘」の刻印がある。ロックハーケンには「秀山荘」や「好日山荘」の刻印がある。

③ アイスハーケン、「ALF・BHEND」の刻印がある。

④ シュラフ(二重、羽毛/ナイロン)、実際に使用したもの。

⑤ マナスル登頂記念に作られたピース箱。青い空にそびえ立つマナスルを目指す隊員の姿が描かれている。



⑤ 登頂記念に作られたピース箱

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会へアクセスすると、「会報ページそのもの」を「拡大およびカラー」で見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jacshiryo102@jac.or.jp
(資料映像委員会)

日本山岳会会報 山 829号

2014年(平成26年)6月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭
 編集人 柏 澄子
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
 ●ネパールで104の新しいピークがオープンになった。このニュースはかなり前から聞こえてきたが、昨年11月の選挙による新内閣発足後、なかなか進展しなかったと聞いている。ネパールの山好きにとっては、首を長くして待ち続けたニュースだった。
 ●最近カトマンズへ行くと、地図屋へ行くのを習わしとしている。各山域の5万分の1地形図を買ってきては、眺めているのが楽しかったが、今回のオープンピークについても、地図の中で探して、じっくりと山容を眺めてみたい。
 ●次号は総会特集。増ページを予定しているが、それでも紙幅が足りないのが現状であるため、いくつかのニュースを8月号に送ることにご了承ください。(柏 澄子)